

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2.2 「見方」を開発： インドの染織資料が見えてくる, コメント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子, 佐藤, 優香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008308

2.2 「見方」を開発 — インドの染織資料が見えてくる

上羽 陽子
(国立民族学博物館)

要旨：本ワークショップの目的は、学校教育においてどうやって子どもたちが民族資料と出会い、いかに観察や鑑賞をし、どのように学びを紡いでゆることができるかを実践的に検証することにある。ワークショップでは、筆者の調査地のインド西部の染織資料を事例に取り組みをおこなった。結果、民族資料においては、その造形物が生みだされた社会的・文化的背景に注目し、その資料がもつ造形的特徴とともに、学びのプロセスを経ることで、資料の魅力や物語に迫ることが可能であることが明らかとなった。同時に資料と直にふれあいながら民族誌的情報を学ぶことによって、造形物が生みだされた異文化への親和性が深まり、他の民族資料への応用も可能であることが示唆された。

キーワード：学びのプロセス、民族資料、インド刺繍、文化的・社会的背景、親和性

1 はじめに

国立民族学博物館（以下、民博）は世界各地から集められた標本資料約34万点を有する文化人類学・民族学を主とした博物館機能を持つ研究所である。常設されている本館展示場には約1万2千点の標本資料が展示されている。これらの民族資料は、制作地や使用地、つくり手やつかい手のさまざまな思いや経験を背景に持っている。

本ワークショップは、このような民族資料をどのように観察し鑑賞すれば、資料のもつ魅力や物語に迫ることができるかを試みたものである。子どもたちがどのように資料と出会い、いかに観察や鑑賞をし、どのように学びを紡いでゆかかを問うものである。本ワークショップは、国立歴史民俗博物館の佐藤優香との協働作業によって生まれた。

ワークショップは、「インド刺繍と出会う」、「『見方』ツールを使う」、「『見方』ツールを開発」、「経験の共有とまとめ」の4つの項目順で実施した。本稿では、ワークショップの流れにそって各項目の実施目的、実施内容、留意点を紹介し、最後に学びのプロセスの重要性について考察を試みる。

2 インド刺繍と出会う

ワークショップの導入部分にあたる「インド刺繍と出会う」では、どのような手法をつかえば資料であるインド刺繍と興味深く出会うことができるかを実証することを目的とした。参加者16名を3グループに分け、目を閉じてもらうことからはじめた。参加者全員が目を閉じた後、スタッフが各テーブルの上にインド刺繍布¹⁾を置き、視覚ではな

く、触覚でインド刺繍布と出会う仕掛けづくりを試みた。

民族資料であるインド刺繍布がどのようなものか想像できるようにファシリテーター役を務めた佐藤が素材、文様、技術、色など少しずつ資料情報を説明した。途中で、参加者が刺繍布の一部に触ることによってうまれた質問にファシリテーターが答えることで、より新たな想像が広がり、実際にみてみたいという気持ちを引き出すように留意をしながら実施した。

その後、ファシリテーターとのやりとりから、数名ずつ目をあけてもらい、実際にみた様子を言葉にして、まだ目を閉じている人にどのようなものかを伝えてもらった。最終的には全員が目を開けてインド刺繍を観察した(写真1)。



写真1 刺繍布をじっくり観察する参加者

導入部分では、いかに参加者がこれから対象となる民族資料に興味を持つことができるかといった点が重要となる。そのような観点からは、目を閉じて資料と出会うことは有用な方法であることが明らかとなった。資料をただ視覚のみで観察するよりも、目を閉じて指先に全神経を集中させることで、資料の大きさや質感、素材、技術などをより集中して参加者は読み取っていた。

目を閉じてどのような布なのか各人が想像することによって実物を見ることへの期待感を高め、想像とのギャップを埋めることによってより深い鑑賞へと導かれることが実証された。

3 「見方」 ツールを使う

民族資料と出会った後、資料をより深く理解するために事前に準備をしたワークショップツール²⁾をつかって、染織資料をみる時のポイントについて紹介をした。使用したワークショップツールは「刺繍布はどんな色合わせ?」「刺繍布にひそむ生き物は何?」「刺繍とは布に縫い描くこと!」「ミラー刺繍ってなに?」の4つである。これらのツールは、資料の色や文様、素材、技術に着目して、よりじっくりと観察するために筆者が中心となって開発したものである。

「刺繍布はどんな色合わせ?」は、B7サイズでつくった15色の色カードのなかから、刺繍布や刺繍糸の色を選び出すというものである(写真2, 3)。選んだ色と残った色と比較することで、地域や民族によってもちいる色が異なることを実感し、どうしてそのような色もちいるのかといった疑問を抱かせることが目的である。また、選んだ色を刺繍布と同様の配列にすることで、隣にどういった色をもってくるのかといった地域や民

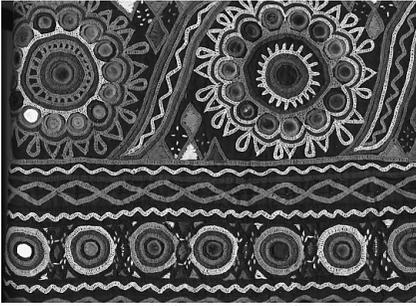


写真2 鮮やかな色使いのインド西部の刺繍布

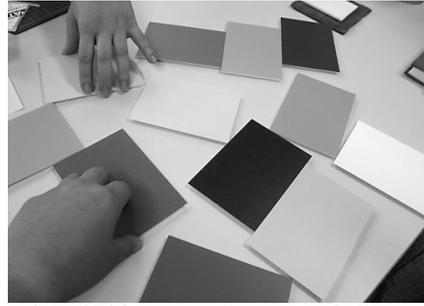


写真3 刺繍布をみながら色カードを選択する



写真4 草花や生き物が描かれているインド西部の刺繍布



写真5 文様カード（左：サンリ、右：クジャク）

族特有の色合わせを経験する目的としている。

そのため、このツールを使用する際には、乾燥地帯であるために色味の少ない現地の風景写真や、鮮やかな衣装を着用する現地の人びとの写真などをみせながら、どのような環境で過ごしている人びとが好む色であるかについて説明をおこなった。

「刺繍布にひそむ生き物は何？」は、刺繍布に描かれた文様に注目するように開発された。刺繍布の文様をB7サイズのカードに線描し、裏面には名称と現地名を示した（写真4、5）。参加者は数多くある文様のなかから生き物の文様を探しだし、カードと照らし合わせながら、どのような生き物が描かれているかを想像する。このツールでは、文様を探すために注意深く刺繍布を観察するとともに、生き物を文様表現しているつくり手の思いを慮ることを目的とした。

このツールを使用する際には、制作地において、どのような生き物が生息しているのかといった地理的環境の話から、その社会における文様の吉祥性と儀礼時にはそのような文様が社会で重要な役割を果たしていることを解説した。



写真6 拡大鏡で縫い目を集中して観察する

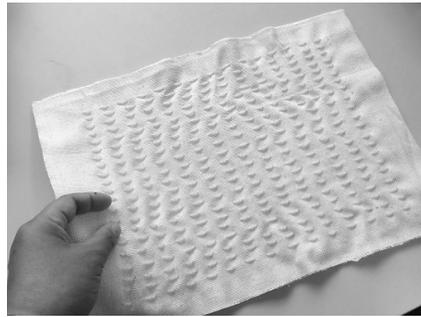


写真7 縫い目が生みだす表情を観察する

「刺繍とは布に縫い描くこと！」では、刺繍技術の基本を学ぶことを目的としてツール開発をおこなった。まず、参加者は拡大鏡を使用して刺繍布の糸をじっくりと観察する(写真6)。もしくは目を閉じて縫い目を指でなぞる。このような手法で刺繍布を観察すると、刺繍糸の縫い目から人の手の動きや表情を感じることができる。そして、薄地に運針をした布や、薄地を何枚も重ね合わせて運針をした布、くわえて糸の太さを変えた布など、さまざまな質感の運針布ツールを触り、さらに数針運針縫いを体験する(写真7)。視覚や触覚で糸を縫う、針を刺すという行為を感覚的に理解することが目的である。

このような体験をすることによって、参加者は、刺繍布の表面や裏面をよりじっくり観察することができ、糸の動きや糸量を想像することで、つくり手に思いをはせることができる。さらに、このツールを体験しながら、制作地における刺繍技術の特徴や、対象地域では近代まで布や糸は金銭を介さないと入手困難な素材であり、それらをいかに有効に使用して女性たちが創意工夫のもとで文様表現をおこなっているかを説明した。

「ミラー刺繍ってなに？」は、対象地域の刺繍技術の特徴であるガラスミラーを縫いとめるミラー刺繍について、衣装着用体験とガラスミラーの素材から理解を促すことを目的としたツールである。目を閉じて刺繍布と出会ったときにもっとも質問が多かったのが、このミラー刺繍である。

ガラスミラーを全面に縫い付けた花嫁用上衣を参加者が着用し、動くことでキラキラと反射する様子を見て、着用者の感想も含めてミラー刺繍についての理解を促した(写真8)。そのため、縫い付けるガラスミラーの製作工程を実物と写真で解説し、CDをつかった大型のミラー刺繍縫い方キットを開発した(写真9, 10)。このツールを使用する際には、現地でのガラスミラーの役



写真8 ミラー刺繍がほどこされた花嫁用上衣

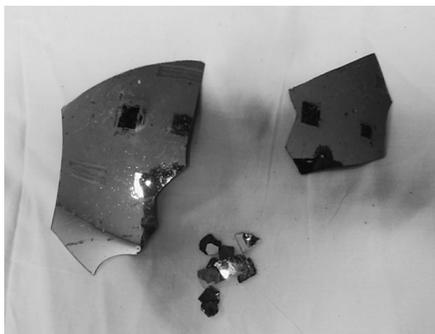


写真9 ガラスミラーを割って刺繍用に加工したもの

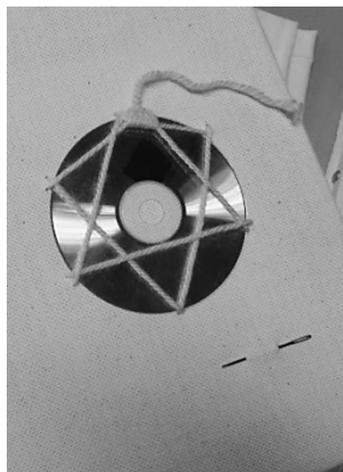


写真10 CDをもちいたミラー刺繍縫い付け工程キット

割について紹介し、邪視信仰において、ガラスミラーや金属が邪視除けの役割を持つことを説明した。

このように「『見方』ツールを使う」では、事前に準備したワークショップツールをもちいることで参加者が資料をじっくり観察することができた。また、ツールを使用する際に、その資料に関する文化的・社会的背景の説明をおこなうことで、造形的特徴からうみだされる疑問を持ちながら、その造形物がうみだされた文化的背景に思いをはせることによって異文化への親和性が深まると考えられる。

4 「『見方』ツールを開発」

「見方」ツールでの経験を踏まえて、「『見方』ツールを開発」では、各グループで「見方」ツールの新たな制作をおこなった。その際に佐藤が中心になって制作した「『見方』ツールをつくってみよう」と題したワークシートを各グループに配布した。本ワークシートは、参加者がワークシートの項目にそって学びの目標を決めることができ、さらに「見方」ツールをつくるだけでなく、学びのプロセスも構築できる仕組みとなっている（写真11）。

写真11は、1つのグループ（以下、グループAとする）のワークシートである。ここではグループAが作成したワークシートを事例として紹介する。

グループがはじめにおこなうことは、刺繍布にまつわる注目すべきストーリーを選ぶことである。

グループAでは、婚礼時に花嫁が花婿の家に贈る持参財を入れるための持参財袋に注目した。そして持参財袋にまつわるストーリーのなかで、特に文様の意味やモチーフと

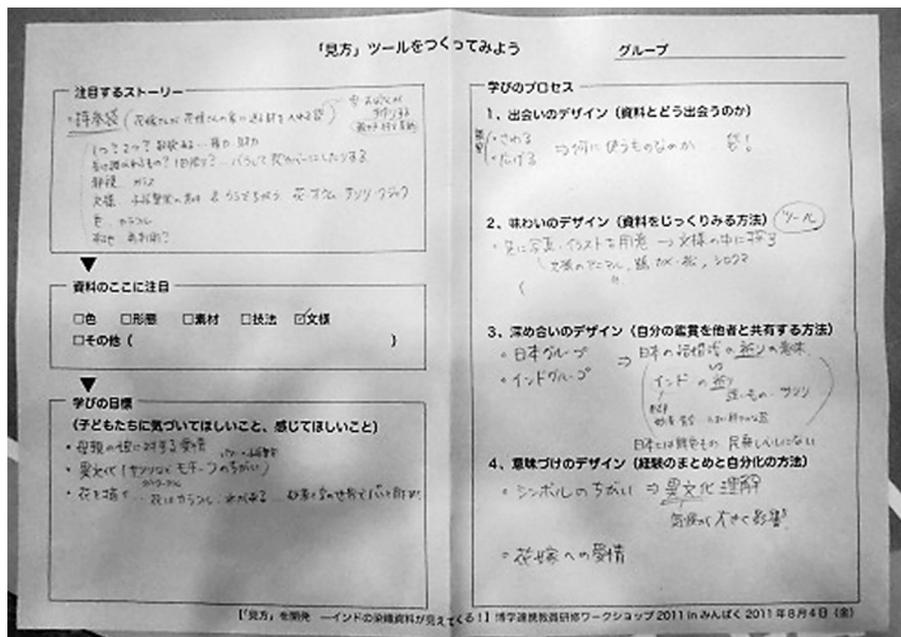


写真11 ワークショップで使用したワークシート

なった生き物に注目し、学びの目標（子どもたちに気づいてほしいこと、感じてほしいこと）を「母親の娘に対する愛情」、「異文化（サソリ、クジャク、オウムなどモチーフの違い）」、「花を描くことの意味」の3つに設定した。

そして、グループAはワークシートの4つの学びのプロセス、「1、出会いのデザイン（資料とどう出会うのか）」、「2、味わいのデザイン（資料をじっくりみる方法）」、「3、深め合いのデザイン（自分の鑑賞を他者と共有する方法）」、「4、意味づけのデザイン（経験のまとめと自分化の方法）」を考えた。

「1、出会いのデザイン（資料とどう出会うのか）」では、「さわる」と「広げる」をキーワードに資料の用途に注目した。「2、味わいのデザイン（資料をじっくりみる方法）」では、新たな「見方」ツールを開発した。鶴や亀、松、花などの写真やイラストを用意して文様にそのものがあるかを探すツールを作成した。グループAの「見方」ツールの特徴は、異文化理解を促進させるために日本で吉祥文様とされている鶴や亀、松などを取り上げることで、比較の対象をつくったことである。そして、それらのツールをもちいながら、「3、深め合いのデザイン（自分の鑑賞を他者と共有する方法）」では、日本グループとインドグループに子どもたちを分けることを提案し、日本とインドにおける結婚式の祈りの意味を比較させ、「4、意味づけのデザイン（経験のまとめと自分化の方法）」では、シンボルの違いや花嫁への愛情に注目し、気候などが異なる異文化への理解を促すことを提示した（写真12）。



写真12 参加者が開発した「見方」ツールを発表する



写真13 衣装のパターンがわかる「見方」キットを開発したグループ

そのほかにも衣装が直線断ちで無駄なく縫い合わされていることに注目し、衣装のパターンに着目して、日本とインドの身装文化の異なりを学びの目標としたグループや(写真13)、刺繍の細かさが嫁ぎ先での生家の評価につながることに注目し、刺繍技術から異文化理解を促すことを目標としたグループなど、各グループが資料の魅力や物語に注目しながら、学びの目標や学ぶためのプロセスづくりを試みた。

当初のワークショッププログラムでは、各グループが開発をしたツールをもちいてお互いのためし合い、それらを踏まえて改善版のツールを作成する「試行と修正」の項目を組み込んでいた。しかし、2時間の実施時間では「試行と修正」までの時間確保が困難となったため、この項目はさらなる発展形として省略をし、今後の課題とした。

そして、最後の「経験の共有とまとめ」では、参加者とともにワークショップの振り返りをおこなった。各グループがつくりあげたワークシートにそって、それぞれが開発した「見方」ツールとともに、「学びの目標」と「学びのプロセス」を発表した。

5 まとめ

本ワークショップではインド刺繍布をもちいて、どうやって子どもたちが民族資料と出会い、いかに資料をじっくりと観察や鑑賞をしながら、どのように学びを紡いでゆくことができるかを実践的に検証した。

民博で勤務をしていると「資料のなにをみたらよいかわからない」、「資料がうみだされた文化をどのように捉えてよいかわからない」といった小・中学校教諭の声を聞くことが多々ある。筆者は調査地の染織技術や文化背景を紹介するワークショップをおこなうことはあるが、今回のような性格のワークショップに取り組んだのははじめてである。

本ワークショップの最大の特徴は、資料に施され技術や文化背景を解説する、あるいは理解させるのではなく、どのように解釈するかといった点に焦点をあてたワークショップデザインになっていることである。参加者からのアンケートには、「見学の際にどこに

注目するように子どもたちに促せばよいか悩んでいたため参加した, 『『見方を開発』という言葉に惹かれた』といった意見があった。つまり, ただ参加者が異文化を理解することが目的ではなく, 参加者自身が「見方」ツールでの経験や学びをもとにして, 自身の鑑賞を他者と共有する方法を思案し, 自身の解釈に基づいてワークショップデザインをおこなうことに本ワークショップの意義がある。

民博の標本資料には, それらをつくった人びと, 使っていた人びとの存在があるため, その資料がもついずれかのストーリーに注目することが容易である。そのストーリーに関連する造形的特徴と組み合わせることで注目することによって, 必然的に学びの目標を構築することが可能となる。特に民博の展示資料は特別に明示されていないもので手に届く範囲であれば, そっとやさしくその質感を確認することが許されている希少な博物館である。資料に直にふれあいながら民族誌的情報を学ぶことが可能なのだ。

また, 本ワークショップがより意義深いものになった理由には, ワorkshopデザインの実験が豊富な佐藤による綿密に準備された導入部分とワークシート, また筆者の調査地の資料をもちいたことで技術的背景と民族誌的背景をより充実した形で提示できたことにある。それぞれの得意分野を協働し, 1つのワークショップデザインを構築できたのだ。このような協働作業によるワークショップは, 本博学連携ワークショップの醍醐味ともいえる。

注

- 1) 本ワークショップでは, 試行的に筆者の染織資料を事例に取り組みをおこなった。
- 2) 今回使用したワークショップツールは, 民博・文化資源プロジェクト「表現で出会う・表現でつながる (代表: 西洋子)」におけるワークショップ「インド刺繍—思いと出会う・願いでつながる—」で佐藤と筆者が開発したものである。本ワークショップは, そこで開発したワークショップキットをさらに本ワークショップの趣旨に沿って改善したものである。

コメント

佐藤 優香

(東京大学)

1 はじめに

国立民族学博物館の博学連携ワークショップのひとつとして実施されたワークショップ『「見方」を開発—インドの染織資料が見えてくる』は、インドの染織資料研究を専門とする上羽陽子氏と、博物館教育や学習環境デザイン研究を専門とする筆者が共同で企画開発を行った。参加者は教師や博物館教育に関心のある大人で、その先には子どもへの学びが見据えられている。そのため、提供するワークショップの仕組みそのものが重要な意味を持っていた。ここでは、ワークショップの構造を解説することを通して、学びのデザインについて考えたい。

2 入れ子構造仕立てのデザイン

本ワークショップでは、テーマとなっているインドの染織資料の背景にある文化について興味を抱くことや理解することを通して、日頃なじみのない民族資料とどのように向かい合えばよいのかを考えることが参加者に求められている。すなわち、染織資料をテーマとしたワークショップ体験において、その学びのプロセス自体をメタに捉え直し、自らが構築できるようになることが目標となっているのだ。このような意図から、1) インドの染織資料について興味を抱きじっくり鑑賞することでその背後にある文化に思いを馳せる、2) 鑑賞課程で提供される資料の見方とそのツールについて考える、3) ワークショップにおける学びのプロセス全体を俯瞰しワークショップの構造を把握する、4) 資料の文化的背景を意識したワークショップを組み立てる、5) 企画したワークショップを発表しあうという内容で、ワークショップ体験が入れ子構造仕立てでデザインされている。

3 学びのプロセスの4フェーズ

ワークショップデザインの核になっているのが、4つのフェーズで構成される学びのプロセスである。ここで筆者がワークショップデザインのモデルとしてあげている4つのフェーズとは、1 出会いのデザイン、2 味わいのデザイン、3 深め合いのデザイン、4 意味付けのデザインから成る。

まずはインドの染織資料鑑賞ワークショップ、すなわち入れ子の内側の部分にモデルをあてはめて見ていこう。出会いのデザインとは、対象となる資料やテーマとどのようにして出会うのかということにあたる。これはワークショップの導入部分になる。このワークショップに参加したくなる、もっと資料が見たくなる仕掛けが用意されている。次いで味のデザインでは、テーマや資料とどのように関わるのがデザインされている。ここでは、資料をじっくり鑑賞及び観察することでより豊かに味わうために、上羽と佐藤で開発したツールを用いている。そして、資料を味わうと同時にツールを味わう機会にもなっている。続く3つ目の深め合いのデザインとは、参加者間で経験を共有するフェーズである。自己の経験を語り他者の経験を聞くことで、個人的な鑑賞体験が他者と共に言語化され、より深まることが期待されている。意味付けのデザインとは、ワークショップの振り返りを指し、自己の経験を整理し自分化することを目指している。ここでは、この振り返りが次のツール開発ワークショップに内包されている。

染織資料の鑑賞ワークショップを体験した後、グループにわかれて「見方」ツールの開発を行った。これは、先のワークショップを包み込む入れ子の外側である。この部分もモデルにあてはめていこう。ツール開発では、鑑賞ワークショップが出会いのデザインに相当する。インドの染織資料と「ツールを用いたワークショップ」という方法で出会うということである。味のデザインは、ツールの開発というグループワークであり、ワークショップの手順とそこで使用するツールについて相談することを通して、ワークショップデザインというものを味わう。グループで開発したワークショップの紹介は経験の共有であり理解の深め合いになる。最後に、ワークショップ全体をふりかえり意味付ける。

4 ワークショップの仕組みを学ぶためのツール

ワークショップの仕組みそのものを学びとることを支援するために用意されたのがグループワーカーで用いたワークシート『「見方」ツールをつくってみよう』である。最初に記入する左側には、「注目するストーリー」、「資料のここに注目」、「学びの目標」の3点があげられている。これは、ワークショップをデザインする際の思考のプロセスの一例になっている。学校教育における単元開発が学習目標からはじまるのに対して、ここでは資料の背景にあるストーリーからスタートしている。資料やその文化的背景のどこに焦点を当てるのかを最初に考えるというのは、博物館の学びならではのデザイン手法の一提案とも言えるだろう。

資料の注目ポイントは「色、形態、素材、技法、文様、その他」の選択式になっており、これはインドの染織資料に限らず他の標本資料を見る際の視点として応用することができるように配慮されている。

博物館のワークショップでは、日頃目にすることのない資料群に出会うことになるため、出会い自体が目的化し、何のために見るのか、見ることを通して何を学ぶかが置き去りにされてしまうことがある。ここではそれを避けるために、参加者に何に気づいてもらいたいのか、何を感じてほしいのかを、デザインする際に意識するように学びの目標欄が設けられている。

シートの右半分には、学びのプロセスを記入する(74頁 写真11参照)。ワークシートに印刷されている「1, 出会いのデザイン(資料とどう出会うのか)」「2, 味わいのデザイン(資料をじっくりみる方法)」「3, 深め合いのデザイン(自分の鑑賞を他者と共有する方法)」「4, 意味付けのデザイン(経験のまとめと自分化の方法)」に従って、参加者の行為と思考の手順をひとつずつ考えていく。

このように、ツール開発のプロセスは先の鑑賞を振り返えさせることになっていると同時に、シートのフレームを使えば他の多様な資料鑑賞のワークショップを組み立てる手順が与えられることにもなっている。

5 企画と実践を通して学びを語り合う

本ワークショップでは、学びのプロセスとそこで使用するツールの開発を通して、ワークショップデザインにおける「活動の流れ」と「道具」について議論を深めることができた。先の上羽による報告では「道具」にあたる染織資料とその鑑賞ツールについて詳細に紹介されている。本稿では、「活動の流れ」を、それをデザインする際に有用な4つのフェーズからなる学びのデザインモデルにそって解説した。

専門の異なる二人がワークショップの企画とその実践を通して議論を深めたように、ワークショップの参加者もまた、ワークショップのプロセスにおいて参加者から企画者へと立場を変え議論を深めた。企画し実践することを通して博物館における学びのデザインを語り合う場を継続的に持つことが、博学連携をより豊かで意味のあるものとして発展させるために望まれるだろう。